

目次

● 卷頭言 (岩下明裕)	1
● センター紹介	2
● リレー・エッセイ (ラドミール・コンペル)	5
● 活動報告	6
● 書籍紹介	8



巻頭言 岩下明裕

グローバルリスク研究センター センター長

長崎大学にグローバルリスク研究センターが設置されて2年目に入りました。2024年6月にセンター長に就任して以来、私にとってはセンターをチームとして組み立てることに専念した1年半でした。

センターは北海道大学ラブ・ユーラシア研究センターとのクロスアポイントメントである私と助教を除けば、各部局に所属する教員からなる学部横断型の組織です。各大学には学内措置で作られたセンターが数多くありますが、グローバルリスク研究センターもそのひとつとなります。ただし、この種の研究センターで、全国的にかつ国際的に展開している組織は数える程度しかないのが実情です。

幸いにも長崎大学には、強みのある研究所や人文社会を大きな枠組みでとらえる部局など人的リソースに恵まれています。また日本の西の境界に位置し、世界へのゲートウェイとしての歴史を積み重ねてきた地の利もあります。これらをベースに6つのユニットを考案し、人文社会系の研究を軸にサイエンスを組み合わせ、さまざまなリスク研究を展開することにしました。

私は共同利用・共同研究拠点に長年、勤務してきたこともあり、センターの組織構成やプロジェクト作りに際し、その経験を応用しました。第1に、上記

ユニットをもとに、あるいはユニットをつなぐかたちでのプロジェクトの公募（科研費との紐づけを推奨）、第2に、各プロジェクトを軸にした学外の研究者とのコラボの推奨（共同研究員として招請）、第3に、センターに欠けている知見を有する優れた研究者との連携（客員教授として招請）を実施しました。

2025年度からJ-PEAKS（地域中核・特色ある研究大学強化促進事業）が動き出したことも追い風となりました。J-PEAKSの特任研究員を広く公募し、この10月からは2人の優秀な若手研究者が雇用されています。またセンターには国内外の研究者が集う会議スペースもあり、ここでセミナーをシリーズとして実施し、ハイブリッドによる対外配信も始まりました。文教キャンパスの研究開発推進機構2階に居場所を構えたセンターに、どうぞみなさんも気軽に立ち寄りください。

ゲームができる体制が整いました。これからグローバルリスク学を私たちはどのようにつくりあげていくのか？

そのゲームプランについては次回、お話ししましょう。

* 下記のエッセイもご参考ください。

<https://cgr.nagasaki-u.ac.jp/2421/> (第5回マトリョーシカ・インタビュー 22頁から)

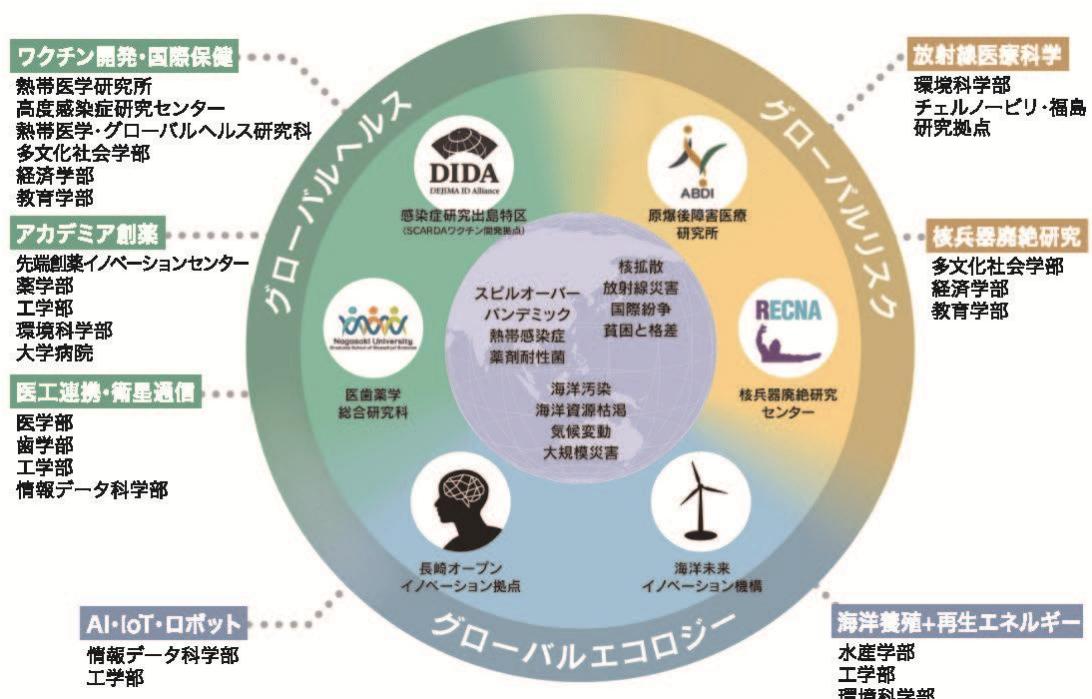
センター紹介

長崎大学は「人類と地球の抱える多様で相互に連関する問題群の解決に向け、学際的にその知を結集・創造することで世界的プラネタリーヘルスの実現に貢献する」ことを宣言し、

- ・グローバルヘルス
- ・グローバルリスク
- ・グローバルエコロジー

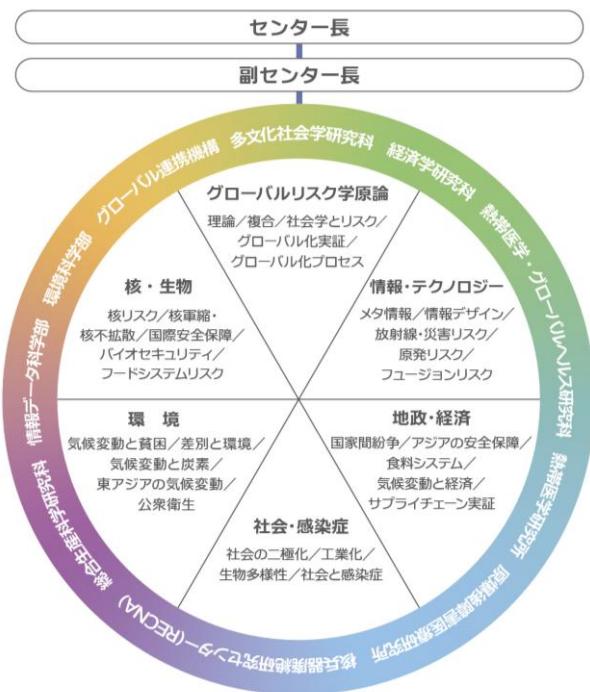
の3つの分野に貢献する研究と教育を推進している。

この3つの分野のうち、「グローバルリスク」に関する研究を推進するために2024年6月1日に設置されたのが、長崎大学グローバルリスク研究センター（CGR: Research Center for Global Risk）である。CGRは、長崎大学に所属する教員が、文理協働の下、人文社会科学的叡智を統合し、核の使用リスクや、地球環境破壊、パンデミックといった「人類の存続に影響しうる地球規模のリスク」について学際的な研究を推進することを目的としている。他機関との連携も重視しており、連携機関として既に、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（SRC）、福島国際研究教育機構（F-REI）、国連軍縮研究所（UNIDIR）、ストックホルム国際平和研究所（SIPRI）、国際連合大学（UNU）、BASIC（British American Security Information Council）、鹿児島大学国際島嶼教育研究センターが名を連ねている。こうした連携機関との共同研究を含む研究活動を通じ、国際社会へさまざまな提言を行うとともに、次世代の研究者、政策立案能力のある専門家、国際社会におけるリーダーの育成も行う学際的研究創発の場をつくることを目指している。



【CGRの6つのユニットと構成員】

CGRでは、領域を超えた複合的かつ重層的なリスク生成を予見し、それに対処するための研究を行うために、グローバルリスクを以下の6つのユニットに区分して共同研究を行っている。



○グローバルリスク学原論

Compel Radomir ユニット長 多文化社会学研究科 准教授
(比較政治学)
Gülbeyaz Abdurrahman 多文化社会学研究科 准教授
(人間科学・記号論・社会理論)
寺田ゆき 多文化社会学研究科 助教 (社会理論・国際社会学)

○地政・経済

式見雅代 ユニット長 経済学研究科 教授
(銀行論・企業金融・サステナブルファイナンス)
葉柳和則 多文化社会学研究科 教授 (地域研究・国際文化論)
Alayna Ynacay-Nye 多文化社会学研究科 助教
(政治経済学・農業社会学)
桑波田浩之 経済学研究科 准教授 (経済学・国際貿易)
清田智子 グローバル連携機構 准教授 (国際安全保障・インド)

○環境

三輪加奈 ユニット長 経済学研究科 教授 (開発経済学)
河村有教 多文化社会学研究科 准教授 (刑法学・国際刑法学)
五島聖子 総合生産科学研究科 (環境科学系) 教授 (環境計画)
昔 宣希 総合生産科学研究科 (環境科学系) 准教授 (環境経済学)
Lina Madaniyazi 热帯医学・グローバルヘルス研究科 准教授
(環境疫学・気候変動・大気汚染)

○情報・テクノロジー

高村 昇 ユニット長 原爆後障害医療研究所 教授 (放射線リスク科学)
田村康貴 多文化社会学研究科 助教 (倫理学)
金谷一朗 総合生産科学研究科 (情報データ科学系) 教授
(メディア芸術・感性情報学・デザイン学・文化財科学・文化人類学)
横山須美 原爆後障害医療研究所 教授 (放射線生物・防護学)
林田直美 原爆後障害医療研究所 教授 (医学・ヘルスケア・甲状腺)

○社会・感染症

飯島 渉 ユニット長 热帯医学研究所 教授 (医療社会史)
金子 聰 热帯医学研究所 教授 (感染症・疫学)
細田尚美 多文化社会学研究科 教授
(移民研究・地域研究・文化人類学)
佐藤靖明 多文化社会学研究科 准教授 (人類学・アフリカ地域研究)
南森茂太 経済学研究科 准教授 (日本経済史・日本経済思想史)

○核・生物

春日文子 ユニット長 CGR副センター長
熱帯医学・グローバルヘルス研究科 教授
(サステナビリティ科学・食品安全)
西田 充 CGR副センター長 多文化社会学研究科 教授
(国際安全保障・核抑止・軍備管理・核軍縮不拡散)
樋川和子 CGR副センター長 核兵器廃絶研究センター 教授
(核軍縮・核不拡散)

○上記の構成員に加え、専任教員として岩下明裕CGRセンター長 (国際関係・ボーダースタディーズ)、Yesbol Sartayev (環境放射線疫学・原子力災害と防災・バンкинグ・企業金融) が配置されている。

【CGRの組織】

さらに、2025年10月1日より、特任研究員として岩間春芽研究員（地域研究・文化人類学）、塩出綾研究員（地域研究・移民研究）の2名が着任している（着任挨拶：<https://cgr.nagasaki-u.ac.jp/2634/>）。両名は、長崎大学が推進する地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）（<https://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/pickup/J-PEAKS/>）の一環としてCGRが行う取り組みにおいて活躍してもらうことが期待されている。CGRは誕生からまだ2年に満たない若い組織であるが、客員教授・共同研究員として以下の方々をお迎えし、超領域型複合研究を行っていく体制を整えているところである。

【客員教授・共同研究員】

○客員教授

黒木英充 東京外国语大学 教授（中東・イスラーム）
松村昌廣 桃山学院大学 教授（軍事安全保障・サイバー研究）
山下範久 立命館大学 教授（歴史社会学・社会理論・世界システム論）

○共同研究員

石田 聖 長崎県立大学地域創造学部公共政策学科 准教授
Lei Yuan 東京大学大学院医学系研究科先端医学領域 助教
大沼 進 北海道大学 文学研究院／社会科学実験研究センター 教授
大平 徹 名古屋大学大学院多元数理科学研究科 教授
岡本 至 文京学院大学外国語学部 教授
鬼丸武士 九州大学大学院比較社会文化研究院 教授
笠井亮平 岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員准教授
片山夏紀 都留文科大学教養学部比較文化学科 専任講師
川久保文紀 中央学院大学法学部 副学長/教授
北川佳世子 早稲田大学大学院法学研究科 教授
小泉 悠 東京大学先端科学技術研究センター 准教授
小長谷有紀 国立民族学博物館 名誉教授
SIOEN Giles Bruno 東京大学大学院新領域創成科学研究科附属サステナブル社会デザインセンター 特任講師
鹿野祐介 大阪大学COデザインセンター 特任講師
新谷一朗 海上保安庁海上保安大学校 教授
高篠仁奈 立命館大学政策科学部 准教授
高橋将宜 中央大学経済学部 准教授
田中極子 東洋英和女学院大学 准教授
仲 隆裕 京都芸術大学芸術学部 教授
長島 徹 外務省欧州局ロシア課 課長補佐
藤田陽子 琉球大学島嶼地域科学研究所 教授
本村直之 グロービス経営大学院 准教授
益尾知佐子 九州大学大学院比較社会文化研究院 教授
山崎吾郎 大阪大学COデザインセンター 教授
山本景子 東京電機大学システムデザイン工学部 准教授
山本宗立 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター 准教授
ユハ サウナヴァーラ 北海道大学 北極域研究センター 准教授



リレー・エッセイ

「グローバルリスク研究とは」 コンペル ラドミール

グローバルリスクの研究は、差し迫った脅威について実践的に研究する学問と捉えられがちです。実際、世界は様々な脅威にあふれています。今日の世界情勢を見渡せば、サプライチェーンの脆弱性による物流の滞り、コロナ禍での医療用品の欠如などが起こっています。さらに深刻なものとして、例えばウクライナ戦争におけるロシアによる核兵器使用の示唆、核兵器保有国同士である印パ間の緊張、北朝鮮の核ミサイルを手にした挑発、人類は核戦争と滅亡寸前の瀬戸際に立たされています。また、フロンガスによるオゾン層の破壊や、二酸化炭素などの放出による気温上昇も、世界的な生活環境の悪化を助長しています。



近代社会は、これらの脅威に対抗するために科学的な手法を用い、脅威の予期可能性を高めました。問題となる脅威を、発生頻度や深刻さを確率的に分析することでリスクとして把握し、対策が採られます。サプライチェーンの再構成、ウイルス感染症に対するワクチンの開発、そして核の脅威に対する国際条約や信頼醸成措置の構築など、生活の便を向上させました。リスクは科学的な解決の裏表と言えます。

しかし、現代社会は科学が約束したほど便利なものになったのでしょうか。予期には限度があります。例えば、福島第一原発事故のように、「想定外」のような、予期されていない失敗も発生します。現在の社会を見ても、安全安心を提供するはずの多くの制度は機能不全に陥っています。先進国の財政は破綻寸前で、年金や介護などの社会保障は危機に直面しています。教育では不登校やいじめが横行し、情報化社会ではAIアルゴリズムが社会の亀裂を増幅し、紛争や喪失感を創出しています。このように、リスクを予防して管理するべき仕組み自体が、新しい危険性を生み出し、リスクを深刻化させているのです。

したがって、グローバルリスクの研究は、「外」にある脅威の実証的分析と除去だけを目的としません。人間活動や社会諸制度もリスクを生み出しているという「再帰性」を前提に、人間の問題性も視野に入れて、認識を深める必要があります。人類や生態系を破滅させるような想定不可能なカタストロフィーをいかに避けていくかについて、検討を重ねていくこそが、研究の核心的な狙いと言えるでしょう。

CGR活動報告

CGRは2024年6月の発足以来、各教員が主体となって様々な研究活動、セミナー、研究会、シンポジウムの開催などを行なってきた。以下はその主なものをリストアップしたものである。

【2024年】

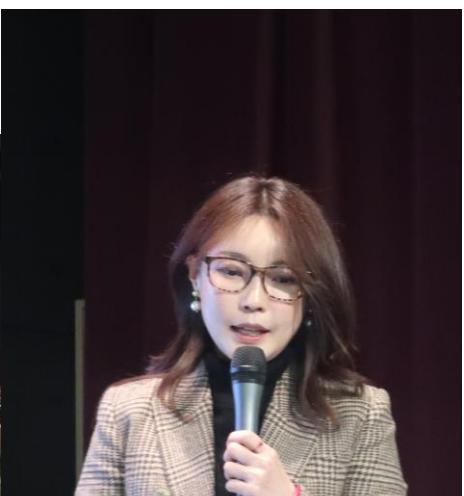
- | | |
|------------|--|
| 2024.6.20 | 【UBRJ/CGRセミナー】領土拡張の道具？ロシアの国籍付与を考える |
| 2024.7.5 | SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー
「人類を取り巻く地球環境～（プラネタリー）バウンダリーズ、ヘルス、リスク～」 |
| 2024.9.9 | SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー
「相互依存と平和：経済は政治を超えるのか？」 |
| 2024.9.12 | 参加型対話会「平和と環境－未来の地球のために」 |
| 2024.9.20 | SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー「核兵器不要の世界に向けて」 |
| 2024.10.12 | JIBSNセミナー2024与那国「境界地域のなかに光をみる」 |
| 2024.10.17 | SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー
「ポスト冷戦後における核兵器のグローバルリスクとは？」 |
| 2024.12.21 | 長崎大学グローバルリスク研究センター・キックオフシンポジウム |



2024.12.21 グローバルリスク研究センター・キックオフシンポジウムの様子

【2025年】

- 2025.1.12 「わたしの食事・わたしの健康・地球の健康」 イオン大村ショッピングセンターにて開催
- 2025.1.15 CGRセミナー
「除去土壤問題を巡る社会科学的課題：多元的公正からの実証的アプローチ」
- 2025.1.27 最新レポート解説イベント「気候変動について今伝えたい、10の重要なメッセージ」
～10 NEW INSIGHTS IN CLIMATE SCIENCE 2024/2025～
- 2025.2.10 UBRJ/CGR 実社会のための共創セミナー
「ダークツーリズムを超えて—北海道と九州をめぐる」
- 2025.3.20-21 次世代研究者国際ワークショップ「21世紀日本におけるボーダー、モビリティ、リスク」
- 2025.5.17 実社会共創・アイランドリスク研究セミナー「しま、くらし、みらい～長崎からの挑戦」
- 2025.6.19 CGR・SRC 共催セミナー「ロシア・ウクライナ戦争下の中国外交」
- 2025.6.30 CGR研究会「クルーズ船というグローバルリスク」
- 2025.7.2 緊急セミナー「イスラエル・イラン戦争を考える～国際秩序・核・トランプ2.0」
- 2025.7.13 世界政治学会（ソウル）でパネル「ロシア・ウクライナ戦争と北東アジアの対応」
- 2025.7.18 第6回CGR研究会「ウルリッヒ・ベックのリスク社会論と刑事捜査におけるAIの活用」
- 2025.7.24 SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー「長崎・ヨルノービリから福島を知る」
- 2025.7.25 India's Rise: Challenges and Possibilities
- 2025.8.8 平和のワークショップ Peace campus
- 2025.8.11 「TEDxDejima 2025～記録を未来へつなぐ～」
- 2025.8.25 参加型対話会「平和と環境」～戦後80年を経て 未来の地球のためにつなぐ～
- 2025.9.8 シンポジウム「リスクアジア」の中の日本・中国－「知のプラットフォーム」構築の課題
- 2025.10.25 JIBSNセミナー2025対馬 境界地域「リスクとまちづくり」
- 2025.11.7 CGR/EES実社会共創セミナー「ジノサイド：イスラエルの行動とテロリズム言説」
- 2025.11.12 コラボ企画セミナー「世界はボーダフル」
- 2025.11.17 特別講演「国際道徳と国際人道法－ウクライナ紛争とガザ紛争を考える」
- 2025.11.18 特別講演「Japan's options after extended nuclear deterrence: needs and obstacles」
- 2025.11.25 一般公開セミナー「気候変動に関する国際司法裁判所（ICJ）の勧告的意見：楽観論、悲観論、懐疑論」
- 2025.11.26 CGR/EES 実社会のための共創研究セミナー「空間と時代を超えた女性たちの物語～戦争、ジェンダー、移動を手掛かりに～」

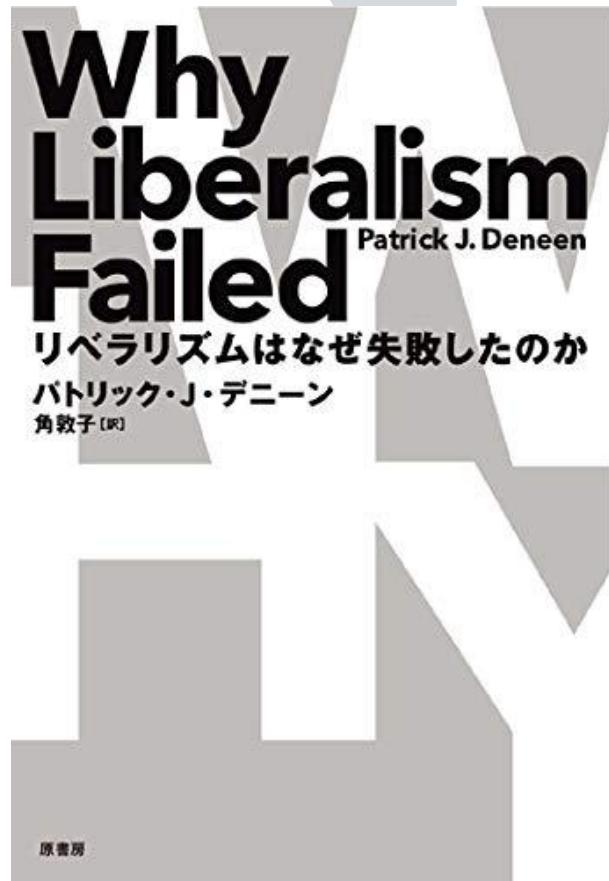


2025.1.27 最新レポート解説イベント「気候変動について今伝えたい、10の重要なメッセージ」
～10 NEW INSIGHTS IN CLIMATE SCIENCE 2024/2025～の様子

書籍紹介

「リベラリズムはなぜ失敗したのか」 パトリック・J・デニーン 著
角敦子 訳
原書房

<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I030068134>



本書は2018年にアメリカの国際政治学者パトリック・J・デニーンによって書かれた原作の日本語翻訳版である。リベラリズムと資本主義がもたらすグローバルリスクとそれへの対応について、国際政治学の枠を超えた学際的かつ深い考察に基づいた内容となっている。

リベラリズムは、「自由」という名のもとに人間の無制限の欲求を満たすことを追求してきた。それこそが、自然を破壊し、金融を破綻させ、格差を生み、経済も破綻させてきた要因であるとデニーンは断罪する。その上で、人間にとって本来の自由とは、無制限の欲求からの自由であり、こうした自由を得るために、文化（自然の制約の中で人間が生存していくよう人間の欲求を抑え、自律の道を習慣化させたもの）があり、リベラルアーツがあるのだと論

じている。リベラリズムがもたらしたグローバル化により文化が損失し、個人の自律も損失し、プラネタリーヘルスも破壊されてきた。リベラリズムによってもたらされたグローバルリスクに対応するためには、リベラルアーツとローカライゼーションの促進、地域共同体を再評価する必要があるとデニーンは説いている。

（CGR副センター長 樋川和子）



長崎大学グローバルリスク研究センター
Nagasaki University
Research Center for Global Risk

長崎大学グローバルリスク研究センター

CGRニュースレターVol.1

〒852-8521 長崎市文教町1-14

2025年12月発行

TEL : 095-819-2964

E-mail : cgr_info@ml.nagasaki-u.ac.jp